

[音 楽]

小規模校における生徒の伸びやかな音楽表現力の育成

ー ボディパーカッションの導入による小集団表現ー

保坂 淑子*

1 研究の意図

(1) 問題の所在

平成15年に経済協力開発機構（OECD）が実施したPISA調査において、我が国の子どもたちの思考力・判断力・表現力等の低下が指摘された。これを受けて平成20年1月の中央教育審議会の答申において、音楽科指導要領改定の趣旨が示されている。改善の基本方針の中に、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに思いや意図をもって表現する力の育成」や「創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から・・・（中略）また、鑑賞活動は、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにするとともに、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成」が述べられている（下線は筆者による）。生徒の意欲的で主体的な学習を通して、音楽科における思考力・判断力・表現力を高めていくことが求められている。

教育現場での音楽学習は、合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導に力を注いできた。授業時間が削減される中で、生徒間での話し合いや感受の共有は各教師が四苦八苦しながらその場面設定を試みている。しかし、生徒の表現に必要な技能の習得を図るためには、教師による一斉指導や生徒のリーダーを中心としたパート練習の展開を行っているのが現状である。そのため、生徒個々による独創的な表現力伸長のための時間が十分でないことも否めない。今日、音楽科に求められる生徒の「協調性」と「個性の伸長」という両極端の力を一題材の中で上手く生かせるものはないかと日々悩んでいた。

当校は、中山間地帯に位置する上越市内で一番の極小規模校で、生徒は純朴で素直である。しかし、一学年十数名の学級で、全校合唱でも50人に満たない規模なので大らかな発声とダイナミックな表現が難しく、のびのびと心を開放して自分を表出できないところがある。また、授業に対しても受身で、新しいものにすすんで挑戦する意欲が乏しい。

さて、ボディパーカッションが教育現場に登場するようになったのは、1900年代後半頃からで、コミュニケーション活動の一端として登場したと言われている。体全体を打楽器のようにたたいて音を出し、リズムアンサンブルを作り上げる活動で、ボディ：体（body）、パーカッション：打楽器の総称（percussion）の造語とされている。具体的には、手拍子、おなか、ひざ、おしりをたたき、ことばを重ねる（ボイスアンサンブル）など、自分の体を楽器にして仲間と協力してアンサンブルを作る。ボディパーカッションの優れた点は、歌が苦手、楽器の演奏が苦手であっても楽譜が読めなくても誰でも参加できることにある。コミュニケーション能力を高め、仲間意識を持ち（所属感）、自己表現力を高め（自尊感情を高める）、見ている人を楽しませる活動に発展する（自己表現）可能性を大いに秘めている。

一方、創作活動についての先行研究では、一題材として扱われた授業がよく見られる。しかし、毎時間授業の導入部で取り扱い継続して行われたものはなかなか見つからない。斉藤と吉田（2012）は「子どもが楽しむ構成活動（音楽づくり・創作）の授業：思春期の発達特性を生かしたボディパーカッションの創作」の中で、ボディパーカッションが、人間関係の構築に大変効果を発揮するだけでなく、音楽教育の活動全般にも未知なる有効性を秘めていると、述べている。

そこで、一週1時間の音楽授業の中で創作活動は単元構成して扱わず、毎時間行い、長期間の中で思考力・判断力を身につけさせたい。しいては、それが合唱、合奏をはじめ様々な活動の表現力の増進にもつながると考えた。

(2) ボディパーカッションによる活動のプロセス

本研究においては、ボディパーカッションの取組を各表現活動の授業時の導入10分間に行うエクササイズとした。また、3つのオリジナルのプロセスを設定し、学習者にとって自然に創作力、判断力、表現力が身に付くよう配慮した。

* 上越市立牧中学校

使う体の部位は、「手（拍子）」、「おなか」、「ひざ」、「おしり」「すね」「胸」「肩（両手交差）」「足踏み」「ジャンプ」とした。

- プロセス① 模倣活動：教師や仲間の表現を模倣し、繰り返す
 プロセス② 即興活動：教師や仲間の表現に引き続き、同じでないものを即興で表現する
 プロセス③ 構成活動：自分たちの考えた表現の1フレーズに対して、「反復」「展開」「再現」などの手法を取り入れ、三部形式などの曲の構成を考え、まとまりのある表現活動を行う

本研究では、山田俊之氏の『楽しいボディパーカッション』（2004）を参考に1，2学期中頃までの24時間の授業において各授業10分単位の構成で創作活動を試みた。活動のプロセスは、1学期を模倣、即興、作品の表現活動、オリジナル部分の創作とし、2学期は主題に対する構成を知った上でより豊かな表現を試みるプロセスとした。

2 研究の目的

本研究は、合唱、合奏指導のはじめに「ボディパーカッション」を導入することで全身を使った表現の工夫をするとともに、集団やグループ活動を生徒自身の創作活動で主体的に取り組ませる。

この活動が、思いや意図をもって表現する力を育て、音楽を楽しみ、自ら考え、工夫する力の育成にも有効であることを明らかにする。

3 研究の方法

本研究は生徒の形式面の変化と内容面の評価の両面から分析する。

- ① 一定の観点からの数値による評価は、質問紙調査法を用いて授業実施前と実施後の意識の変容を数値で見る。また、授業実施直後と終了時の学習活動において具体的にどのような反応が見られたか、VTR再生法を用いて発言内容、回数の変化を記録する。カテゴリーの分析は次の表による。

生徒の行動 R 学習行動	生徒の行動 <カテゴリー 一覧> S 感情行動的発言	生徒の発言 <カテゴリー 一覧> P 素朴発言	生徒の発言 <カテゴリー 一覧> Q 意見発表
1 学習準備 学習の準備有働全般	1 笑う a 爆笑 b 軽く笑う c 嘲笑	1 応答 はい、いいえ	1 理論
2 姿勢 姿勢を正す	2 泣く	2 相づち うん、そう	2 感覚
3 挙手 手を挙げる	3 賞賛 拍手する 他を認める行動	3 受容 そうだね	3 技術
4 起立 学習活動のために立ちあがる	4 沈黙	4 つぶやき	4 事実
5 歌唱 歌唱活動を行う	5 拒否 嫌がる 拒絶する	5 譲り合い	5 質問
6 器楽演奏 器楽 演奏の活動を行う	6 同意 うなづく	6 疑問	6 その他
7 鑑賞 a 見る b 聴く	7 緊張	7 発表要求	どれにもあてはまらない内容の発言
8 操作 ・教材の操作	8 ため息	8 訂正 ちがった	
9 書く 書く行動全般をさす	9 歓声	9 感動 すごい	
10 見る 見る行動全般をさす	10 疑問	10 くやしがる	
11 聞く 聴く行動全般をさす	11 ざわめく	11 拒否	
12 話し合う 話し合いの行動全般をさす	12 照れる、はにかむ	12 私語制御	
13 思考 思考活動全般をさす		13 学習の始め、終わりの挨拶	
14 練習 練習活動全般をさす			
15 模倣 教師の真似をする 口ずさむ			
16 静寂 自己制御、他者制御をもって静かにする			
17 学習終了の後片付け			

このうち本研究では、生徒の発言のみ分析し、考察してみた。

- ② 内容面での評価は、生徒の学習プリント、文章表現の中から質的内容を読み取る。
- ・ 感受に関わる内容の記述
 - ・ 技術に関わる内容の記述
 - ・ 論理に関わる内容の記述

4 実践の概要

本研究全24時間の授業の主な学習の構成は以下のとおりである。表現の種類の名前は筆者の考えによるものである。

学期	表現の種類	学習内容	時間
1 学期 (15時間)	エクササイズ(模倣)	教師の表現を模倣し、繰り返す	3 (10分×3)
	エクササイズ(即興)	教師の表現の後に全く違ったリズム表現を即興で行う	2
	既成曲の表現	『クラップ&ストンプ』を使ってグループ内でリズムアンサンブルを行う	5
	既成曲内の創作表現	即興部分をグループで相談して創作し、作品全体を完成させる	5
2 学期 (9 時間)	創作表現 (構成)	「主題」「応答」「反復」「展開」「再現」「終結」等を用いて作品の構成を考える	5
	創作表現 (総合)	ダイナミクス (強弱) 音色の変化 (体の部位による違い) を考えてより豊かな表現をする	4

授業の実際

- ① 対象生徒 新潟県公立中学校2 学年13名 (男子5名 女子8名)
- ② 実施期間 平成22年4月～11月
- ③ 具体的な学習活動

学期	学習期	具体的な学習活動
1 学期 (15時間)	エクササイズ (模倣) 3 時間	リズムボックス (4 ビートロック) をBGMで流し、教師の4 拍2 小節分の表現を模倣し、繰り返す。教師対一生徒 これを繰り返しながら、全員リレー方式で行う 全員にその場で賞賛、評価を与えることを忘れずに行う。また、生徒個人の様子を見ながら、その生徒にあった課題を与えることに気を配った。 ①手拍子によるリズムうち ②足、手、肩、おなか、ひざ、おしりを使ったリズムうち
	エクササイズ (即興) 2 時間	教師の表現の後に全く違ったリズム表現を即興で行う。 リズムボックス (4 ビートロック) をBGMで流し、教師の4 拍2 小節分の表現の後に必ず、友だちとも教師とも違った作品をその場ですぐ行うことを原則とする。教師対一生徒 これを繰り返しながら、全員リレー方式で行う。 全員にその場で賞賛、評価を与えることを忘れずに行う。どんなに稚拙なものであっても認めた上で評価をする。足、手、おなか、ひざ、おしりのうち3種類以上の部位を使うように心がける。
	既成曲の表現 5 時間	『楽しいボディパーカッション』山田俊之著 音楽の友社P72～78『クラップ&ストンプ』を使って4人編成のグループをつくりリズムアンサンブルを行う。 1～4までのそれぞれのパートの役割を決めて作品の表現活動を行う[A]から[E]までの構成の作品であるが、1時間の授業の中では一つを目途に練習を行った。
	既成曲内の創作表現 5 時間	『クラップ&ストンプ』[D]の部分である即興部分をグループで相談して創作する。 一人2小節間を個人で担当する。全員で「ヘイ ヘイ ヘイ ヘイ」の4拍の掛け声の後に1パートから順に即興し、つなげていく。 即興部分についてはアイデアを出し合いながら必ず友だちと違うオリジナルな創作をするように心がける。
2 学期 (9 時間)	創作表現 5 時間	『クラップ&ストンプ』の1パートの最初の四小節間のリズムパターンが「主題」とすると、2, 3, 4がそれぞれ「応答」として重なり合う。 つぎの[B]が「反復」[C], [D]が「展開」[E]が「再現」「終結」になることに気付かせる。 これを用いて作品の構成を考える。個人で動くもの、複数で動くもの、全体で動くもの、高さ、横の広がり等を考えて立体的な動きに転じていく。
	創作表現 (総合) 4 時間	音色の変化 (体の部位による違い) 足、手、肩、おなか、ひざ、おしりの各部位による音色の変化に気付かせ、もう一度、個人の主題の表現を考える。 ダイナミクス (強弱) をつけながらより豊かな表現活動を試みる。

④ 評価

- (模倣) 教師の範奏にできるだけ近づこうと模倣し、大きな体の動きと音の出し方ができたか。
- (即興) 自然に体を使って、大らかで独創的な即興表現ができたか。
- (既成曲の表現) 友だちと教えあいながら、『クラップ&ストンプ』の作品を楽譜を見ないで表現できたか。
- (既成曲内の創作) 作品中の個人の即興部分について個性的に表現することができたか。
友だちと協力しあいながら、効果的な即興表現ができたか
- (創作表現) 音楽の作品には主題があり、それを繰り返したり、展開、再現させることでより分かりやすい作品になるように構成されていることが理解できたか。
作品の構成を理解した上で全体としての動きを立体的になるように工夫できたか。
- (創作表現総合) 体の各部位による音色の違いをうまく利用してダイナミクスを考えた豊かな表現ができたか。

5 結果及び考察

(1) 一定の観点からの数値による評価・・・量的な変化

実施前4月の授業分析 生徒の行動と発言のカテゴリー分析

実施後11月の授業分析 生徒の行動と発言のカテゴリー分析 その比較

① 1学期最初の授業の1時間をVTRに録画から

(素朴発言)		(意見発表)	
「相づち」うん、そう (友だちに対して)	3回	「感覚」感受的な内容の発言	3回
「受容」そうだよ	2回	「技術」技術的な内容の意見	1回
「応答」はい、いいえ	4回	「事実」事実に基づく意見	2回
「練習要求」もう少し練習させて	1回	「理論」	0回
「疑問」～したいのですが、どうしたらよいですか。	0回	「質問」	1回
「感動」すごい やった	2回		
「くやしがる」くそー	1回		
「訂正」違った	1回		

② 2学期最後の授業の1時間をVTRに録画から

(素朴発言)		(意見発表)	
「相づち」うん、そう (友だちに対して)	6回	「感覚」感受的な内容の発言	4回
「受容」そうだよ	7回	「技術」技術的な内容の意見	7回
「応答」はい、いいえ	5回	「事実」事実に基づく意見	3回
「練習要求」もう少し練習させて	10回	「理論」	5回
「疑問」～したいのですが、どうしたらよいですか。	5回	「質問」	4回
「感動」すごい やった	12回		
「くやしがる」くそー	6回		
「訂正」違った	9回		

それぞれの授業では、活動内容が違うので単純に比較分析はできないが、発言内容と回数が増えたことから、授業中個々の生徒が生き生きと表現活動にいそしみ、心が開放され自己表出できるようになったことが伺える。特に、素朴発言の中の「練習要求」の回数、意見発表の「理論」や「技術」に関する発言回数が増えていることから、この活動が『思いや意図をもって表現しようとする力の育成』と関わっていることがわかる。

③ 4月当初、音楽の授業について生徒に質問した結果は次のとおりである。(質問紙調査：対象生徒13名)

1 音楽の授業が好きな人に聞きます。音楽の授業の何が好きですか。 (自由記述形式、複数回答)	2 音楽の授業が嫌いな人に聞きます。音楽の授業の何が嫌いですか。 (自由記述形式、複数回答)
・歌が好き、得意 5人	・歌が嫌い、大きな声を出せといわれる 6人
・ピアノが弾ける 1人	・楽譜が読めない、わからない 8人
・いろいろな楽器が弾ける 3人	・自分の好きなジャンルの曲をやらない 1人
・いろいろな曲が聴ける 8人	・得意な人とそうでない人がはっきりしている 1人
・勉強しなくてよい(学習内容が難しくない) 1人	・楽器をやってもなかなかうまくならない 3人

本研究である「ボディパーカッション」を取り入れた学習を終えた後、生徒に質問した結果は次のとおりである。

1 音楽の授業が好きな人に聞きます。音楽の授業の何が好きですか。(自由記述形式、複数回答)	2 音楽の授業が嫌いな人に聞きます。音楽の授業の何が嫌いですか。(自由記述形式、複数回答)
・歌が好き、得意 5人	・歌が嫌い、大きな声を出せといわれる 3人
・ボディパーカッションが好き 8人	・楽譜が読めない、わからない 3人
・いろいろな楽器が弾ける 3人	・自分の好きなジャンルの曲をやらない 1人
・いろいろな曲が聴ける 8人	
・体を動かせる 4人	
(質問紙調査：対象生徒13名)	

1 「ボディパーカッション」のある授業は好きでしたか。 はい 93% いいえ 7%
2 「はい」と答えた人に聞きます。「ボディパーカッション」の授業の何が良かったですか。(自由記述、複数回答)
・楽譜が読めなくても楽しめた 8名
・即興で深く考えなくてもできる 10名
・自分たちで話し合いながら作っていきける 11名
・やらされているのではなく自分から作っていきける 5名
・今まで音楽が不得意だと思っていた人もすごくうれしそうだった 7名
・曲がどうやってできていくか、すごくよくわかった 3名
・全身をつかって表現するのでストレスを発散できた 9名
・声に自信がなくて歌が上手でなかったのが、楽しかった 6名
3 「いいえ」と答えた人に聞きます。「ボディパーカッション」の授業の何が嫌いでしたか。(自由記述、複数回答)
・恥ずかしかった 1名
・体のあちらこちらが痛くなった 1名
・難しかった、よくわからなかった 1名

以上の結果から生徒は体を動かし、自らが創作し、工夫できることに喜びを感じ、協同作業によって生き生きと表現活動にいそしめたことにおおむね満足している様子が伺える。演奏技能がさほどになくとも気軽にできることで、創作意欲が湧き、自主的に話し合いに参加したことが大きな要因と考えられる。

(2) 内容面の評価・質的变化 生徒の学習プリントから

生徒の学習プリントの感想欄から下記の図のように、①感受②技術③論理の内容に分類してみたところ学習開始直前から終わりの段階で質的变化があったことが分かる(文中の下線は筆者による)。

	ボディパーカッション導入直後の授業	ボディパーカッション終了直前の授業
A子	今日の授業ではじめてやってみたボディパーカッションは、先生の真似を繰り返して行うものでした。 <u>②覚えるのにやっとでした。一人一人先生と一対一でつなげてやっていくのでうだうだしている間もなく、②スピード感があってスリル満点でした。①はじめてなのに先生から「グッド!!」と言われてうれしかったです。①周りの友だちからも「すごい」と言われてうれしかったです。音楽の時間に誉められたのははじめてです。</u>	ボディパーカッション最後の仕上げの日でした。私たちのグループでは、やっていくうちに <u>③「花火みたいに表現したいね。A子の即興部分は、『ねずみ花火』みたいにしてね。最後はみんなでスターマインになるといいね」と話し合いました。②おしりと肩でたたく時の音が好きでたくさん使いました。③強弱の変化が思ったよりうまく出せなくて悔しかったです。</u>
評価	① 感受 2 ②技術 2 → ②技術 1 論理 2 終了直前の感想の『ねずみ花火』『スターマイン』等のイメージは作品中の構成について生徒間で話し合った末のイメージと考えられる。 個人の表現に関する感想から、全体の構成を考え、曲全体のダイナミクスに関する感想にまで至った。感受は「うれしい」から「くやしい」に変化しているが、表現意欲の高まりではないかと推察する。 また、活動の中で、教師や仲間から認められた喜び等、自尊感情や所属感を得た様子が伺える。	

	ボディパーカッション導入直後の授業	ボディパーカッション終了直前の授業
B男	何かはじめてのことなので①よくわかりませんでした。①のりは良かったです。授業の最初に見たVTRの映像でニューヨークの街の路上でボディパーカッションをやっている若者たちがすごく①格好良かったです。あこがれるけど、まあ無理かな。	①おもしろかった。めっちゃおもしろかった。これで音楽やっているのかなあと思ったときもあったけれど、①音楽の深さがわかった。今までの中で一番燃えた。①友達に自分の意見もばんばん言えたり、聞いてもらえてうれしかった。③歌だと立体的なことがわからなかったけれど、ボディパーカッションは三次元の世界だってことが僕にもわかった。またやりたい。
評価	① 感受 3 → ①感受 3 論理 1 感受のポイント数は変化がないが、個人的な感情から他者との関わりの中へと自己肯定感や所属感を見いだしている。導入時は全く歌わない生徒だったが、本研究の表現活動に対して心から楽しめるようになってきたことが伺える。	

6 成果と今後の課題

(1) 成果

① 「ボディパーカッション」を導入することで、集団やグループ活動が生徒自身の創作活動で主体的に取り組まれるようになることがわかった。また、この活動が、思いや意図をもって表現する力を育て、音楽を楽しみ、自ら考え、工夫する力の育成に少しでも有効であることが明らかにできた。

② 本研究では、難しい技能を必要としなかったことと、読譜に費やされる時間が少なかったことで、楽譜に対する抵抗感も薄らぎ、読譜の不得意な生徒や変声期に悩む男子生徒にとっては有効な表現活動であった。

③ 授業の導入としてウォーミングアップも兼ねて行くと「授業ルーティン」の役割や生徒間のコミュニケーション活動の活性化としての役割も担うことができる。

④ 他の表現活動ではなかなか見えなかった友達の個性的な創造力の良さを改めて知り、お互いを認め合う言動や発言が多く見られるようになった。

⑤ 本研究は、教師の模倣をすることから始めたが、これが「ボディパーカッション」の基本的な技能を身に付けることにつながり、結果的に生徒はそこから自主的に学習をすすめていけることにつながったと考える。

(2) 今後の課題

体の各部位を使ってたく活動で音色は、演奏者本人にわずかに感じ取られるものであって、観客の多くに聞き取ってもらえるものではない。演奏者が多くなればその特徴は顕著に現れるが、本研究のような少人数の生徒ではわかりにくい。また、ダイナミクス（強弱の変化）も同様に表現を大きくしようと体をたたけばたくほど響きのある音色は損なわれ、生徒の体が赤く染まってしまうこともあった。体の動かし方、高さの変化などにも工夫が必要である。エクササイズや既成曲の表現の学習では、授業導入時の10分で済んでいた活動も、創作表現の総合に至ると10分間では断続的になり、生徒の創作、表現意欲を十分に満たしてやることができなかつた。今後の大きな課題である。この活動が合唱、合奏等の他の表現活動にどのように影響したかも十分に論証できていないので、今後意図的に生徒の実態の変化をデータ化することや、他の表現活動に生かされる指導過程を工夫する必要がある。楽譜が読めなくても簡単にできる表現活動とはいえ、創作時、相手に伝える時、記録する時、いずれにも読譜は重要な能力である。この学習が読譜力にどう結びつけていくか、その方法を思考していきたい。本研究では山田氏の作品を土台にして作品作りをしたが、生徒の作った2小節間のモチーフを題材に生徒自らの作品を作っていけば、生徒の自主性や音楽的な素養もより培われることと思う。ボディパーカッションは、生徒の人間関係づくりやコミュニケーション活動の一環として学校教育現場でよく取り入れられてきたが、音楽科の授業の中で今後どのように活用されていくかはまだまだ未知の分野である。今後、ボディパーカッションも含めて『創作活動』の一手段としてさらに研究を深めていきたい。

引用文献・参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領」文部科学省「中学校指導要領解説 音楽編」(2008)

齊藤百合子, 吉田美希「子どもが楽しむ構成活動(音楽づくり・創作)の授業(第3年次):思春期の発達特性を生かしたボディパーカッションの創作(生成の原理による授業づくりのプロジェクト)」学校音楽教育研究:日本学校音楽教育実践学会紀要16(-)(-), 85-92, 2012

山田俊之「ボディパーカッション入門/体を使った楽しいリズム表現」DVD版「楽しいボディパーカッション」(音楽之友社)(2004)